

家族看護実践力を高める —家族看護エンパワーメントモデルの活用—

高知県立大学

中野 綾美

私たちは、患者の看護を実践する中で、地域でヘルスプロモーション活動を展開する中で、様々な家族と出会う。超少子化・超高齢化が急速に進展し、多様化・複雑化する社会の中で、従来、家族が果たしてきた家族機能（情緒機能・社会化と社会布置機能・生殖機能・経済機能・ヘルスケア機能など）が低下し、家族の脆弱性が指摘されている。家族のかたちも伝統的な婚姻関係を伴わないパートナーとの同居やひとり親家族、ステップファミリーなど多様化し、家族の考え方や価値観、家族関係や集団としてのあり方も家族により異なる。

家族にとって、病気や障がいをもつ家族員の世話、高齢になった家族員の介護を担うことは、容易なことではない。看護者は、ケアに必要な家族員とともに暮らす家族、最近社会的な課題ともなっているヤングケアラーなど、それぞれの家族を独自の存在として捉え、家族の特徴を掴みながら、その家族に適したケアをすること、その家族がもつ力を見極めてその力の発揮を支える—家族のエンパワーメントを支える—ケアが求められていると考える。しかし在院日数が短縮化し、さらにコロナ禍により家族に直接関わる機会そのものが減少している状況下では、家族の全体像をつかむことが難しい、家族との援助関係を結ぶことが難しい、看護の方向性を見出せないなど、家族看護実践力を高めることが求められていると考える。

介護のための離職やヤングケアラーの問題、児童の虐待や高齢者の虐待、老老介護など、深刻な問題

が生じている。理論やモデルの実践・研究・教育への活用は、看護実践の道しるべとなり、新たな看護の知を創造し、次代の看護者に伝えるなど、看護実践力を高めることに役立つ。家族看護エンパワーメントモデル（野嶋，2005）では、「家族は主体的な存在であり、家族自身の力で様々な状況を乗り越えていく集団である」と捉え、「家族エンパワーメントは、家族自身が獲得していくものであり、家族エンパワーメントの主体は家族である」とする。家族看護の役割は、「家族の意思や家族の権利を守る重要なパートナーとして常に家族の辿る意思決定のプロセスに添いながら、ともに歩み、家族自身が自らの有する力を発揮できるように支援することである」としている。家族の病気体験の理解、家族との援助関係の形成、家族アセスメント、家族像の形成、家族エンパワーメントを支援する看護介入という5つのステップがあり、全てのステップにおいて、家族の意思決定や価値観を尊重することが含まれている。意思決定の支援・アドボカシーは、家族看護エンパワーメントモデルの中核をなすものである。

みなさまと共に、家族看護実践力を高めることについて、家族看護エンパワーメントモデルの実践・研究・教育への活用という視点から考える機会にしたいと考える。

文 献

野嶋佐由美監修、中野綾美編：家族エンパワーメントをもたらす看護実践、へるす出版、2005